

『ほくほく線犀潟駅—お礼を言うこと—』

名誉会長：中尾哲雄

終戦の前の年の八月、小学校二年生だった私は二歳年下の妹と二人で母に見送られて横浜を発ち、上野駅から富山県の魚津へと向かった。戦争が激しくなり学校が集団疎開を始めた頃である。私たち二人はまず先に父の故郷、魚津へ帰ることになったのであった。新潟県の直江津で乗り換えてしばらくすると海が左手にあることに気付いた。魚津とは反対の北へ向かっていたのだ。慌てて下車したのが犀潟(さいがた)という小さな駅だった。ベンチで反対列車を待つことにしたが、汽車は何時間も来ないという。泣きじゃくる妹をなだめながら見た美しい夕陽とカナカナ蝉の悲しいような声はいまも心に残っている。

どうして分かったのか、近所のおばさんがおにぎり「青ねじ」という駄菓子を持ってきてくださった。家で休みなさい、というお誘いをお断りしてベンチでそれをいただいた。そして妹につられるように私も泣いてしまった。

高校に入学して初めての夏休みに、私は家の畑でとれた野菜を担いで犀潟を訪ねた。あのご婦人に一言お礼が言いたかったからである。あの時、ちゃんとお礼を言わなかったのではないか、時折、そのことが気になっていた。しかし、すでに八年が過ぎ去っており、そのご婦人を見つけることはできなかった。駅周辺にはそんなに多く家はなかったが、一軒一軒訪ねて聞いても、みんな心当たりはないという返事であった。

さて、我々は毎日、様々な形で多くの方々にお世話になっている。その場で簡単に「ありがとう」「ありがとうございます」で済ますこともあれば、時には手紙で、あるいは場合によってはお礼の品をもって感謝の気持ちを表すこともある。しかし、お礼のしようがないこともあるし、お礼を忘れていたこともある。さらに気付かないところでお世話になっていることもあろう。社会からの恩恵をごく当たり前のこととして、感謝の念をはじめからもっていないことも多い。私はこれらの感謝の気持ちをまとめてお返しする、まとめてお礼をするのがフィランソロピー（奉仕、社会貢献）のひとつの側面ではなかろうかと思っている。いろいろなお世話の役職をお断りしないのは、原点に「犀潟」があるからかもしれない。

カナカナの蝉といっしょに泣いた妹は若くして交通事故で逝ってしまった。

この夏、いつも会長室の書斎の隅に置いてある思い出の「青ねじ」をカバンに入れて、五年ぶりにあの駅を訪ねた。あの古ぼけた駅の看板は取り替えられていたが、カナカナ蝉は同じ声で鳴いていた。

駅のベンチに座って慌ただしく過ぎていった日々を思い、その中で多くの方々からいただいたご恩、ご厚情にあらためて感謝の念を強くした。

私は毎日、五、六通の手紙を書く。その手紙はお礼である。「我が家のきまり」の第一条は「お礼を言う」だ。

近年、メール、インターネット、そして携帯電話でのコミュニケーションが多くなり、それについて「頭を下げる」という行為が忘れられていくように思う。「お先に」と譲っても会釈をする人が少なくなった。私は時折、大学で講義をしているが、はじめに全員立ってお礼をし、講義が終わったときも全員に立ってもらってお辞儀をすることにしている。

我が社の家庭教育フォーラム（子どもを預けて夫婦で参加）でも、家庭における「お礼」をテーマにすることが多い。向き合って会話し、時には自筆でお礼の手紙を書く。社会のあたたかさを取り戻すために学校はもちろん、家庭、企業、社会で軽く会釈をする、頭を下げてお礼を言う、そんな運動を展開してはどうだろうか。

（このほど、JRから連絡があり犀潟駅の古い看板をいただくことになりました。）

※ このお話は、同窓会総会後の記念講演で語られた内容の一端ですが、文章は「中等教育資料十月号（発売元ぎょうせい）」に掲載されたものです。